海外研修助成申請書

2008 年 7 月 7 日

申請者氏名　生方　史数

- 所属：京都大学東南アジア研究所　　役職：COE助教

- 希望する研修・研究機関名又は研修主催者及び所在地（国名）
  機関名：Development Studies Institute(DESTIN),
  The London School of Economics and Political Science　　所在地：（国名）United Kingdom
  受入研究者：Dr. Tim Forsyth (Reader in Environment and Development, DESTIN)

- 研修・研究の予定期間
  2008 年 9 月 15 日　～　2009 年 2 月 16 日（155 日）

- これまでの具体的な研究内容：

申請者は、京都大学大学院に在学中、タイのカセサート大学に通算 3 年ほど留学し、その間タイ東北部でのフィールド調査に従事した経験を持つ。その成果をまとめた博士論文では、タイ東北部における農家林業の拡大過程を政府・企業及び農民の変化への対応から検証し、今日の途上国における育成林業の促進要因と阻害要因について考察した。学位取得後、申請者の関心は単なる森林減少問題や農林業・土地利用の変化といった現象から、アクター間の相互作用による環境と社会の関係の変化といったより包括的な関心へと移っていった。その後の研究は、東南アジアの農村経済、社会の特徴を踏まえつつ、環境・開発問題をグローバル・ナショナル・ローカルの各レベルにおけるアクターの関係性の結果として捉え、このような関係性が、ローカルな制度の創出及びパフォーマンスにどのような影響を与えるのか、また一連のプロセスにおいて、没地域的な普遍性と地域の特殊性がどう作用しているのかを学際的に研究してきたと要約することができる。

具体的な研究内容としては、大別して以下の三つの主題に分けることができる。

第一の主題は、パルプ産業の原料調達システムを規定する政治経済的要因についての研究である。これは、博士論文のテーマである農家林業の研究を、産業の分析として発展させたものである。分析の結果、80 年代末から 90 年代初頭に起こったユーカリ反対運動が、当時の社会・政治状況と相まって、政府やパルプ工場に自社林によるユーカリ生産という選択肢を捨てさせ、より環境や社会への悪影響の少ない農家林業を基盤とした原料調達を選択させたこと、同時に一部の農民が、変化する社会経済環境への対応としてユーカリを受容していったこと、またこのようにして成立した原料調達システムが、ユーカリや紙パルプ産業の持つ高い規模の経済性を十分に生かせないという欠点を持っていたことが明らかになった。

第二の主題は、コミュニティーによる天然資源管理の研究である。これは、農村社会の急激な変化への個人的な対応（農家林業）でなく、共有資源の保護・再生といったコミュニティーによる集合行為や制度的な対応に焦点を当てるという意味で、博士論文のテーマを発展させたものである。タイ東北部における共有地管理の事例研究の結果、資源の希少化が資源保全的な利用制度への革新をもたらすという誘発的制度革新理論の限界と、農村コミュニティーにおける政府部門のプレゼンスの増大、そしてトップダウンとボトムアップ要因の組み合わせによって生じる多様な制度変化経路の出現が示された。

第三の主題は、途上国の資源管理を制約するグローバルな要因に関する研究である。林産物の貿易自由化に関連する政策動向と議論を整理した後、森林減少が進み国土緑化の政策的プライオリティーが高いフィリピン、タイの事例と、豊富な森林資源を抱え、主要な木材輸出国であるインドネシアの事例を比較検討した。その結果、フィリピン、タイでは貿易自由化によって国内の林産業の多くが国際競争にさらされ、造林・管理のインセンティブが阻害されてしまうこと、インドネシアのような木材輸出国においては、制度的な不全も相まって森林の乱伐が進んでいることが示された。

- 研究業績（主なもの）

Ubukata, F. 2001. “The Expansion of Eucalyptus Farm Forest and its Socioeconomic Background: A Case Study of Two Villages in Khon Kaen Province, Northeast Thailand”. *Southeast Asian Studies* 39(3). 417-436.

Shimamoto, M.; Ubukata, F.; and Seki, Y. 2004. “Forest Sustainability and the Free Trade of Forest Products: Cases from Southeast Asia”. *Ecological Economics* 50(1-2). 23-34.

Ubukata, F. 2006. “Rule Formation Process in Communal Forest Management: the Cases in Yasothon Province, Northeast Thailand”. A Paper presented at the 11th Biennial Conference, International Association for the Study of Common Property, Bali Indonesia, Jun. 19-23, 2006.
http://dlc.dlib.indiana.edu/archive/00002079/00/ubukata_fumikazu.pdf

生方史数 2007.「プランテーションと農家林業の狭間で：タイにおけるパルプ産業のジレンマ」『アジア研究』53(2). 60-75.

生方史数 2007.「コモンズにおける集合行為の２つの解釈とその相互補完性」『国際開発研究』16(1). 55-67.

● 研究企画書

1. 研究課題
資源を巡る対立・協調のプロセス：東南アジアの事例から
キーワード：希少性、制度変化、グローバル化、地方分権、資源紛争と協力、環境の権原

2. 研究の目的
資源は人間が生活を営む際に不可欠なモノの総称である。古来より、資源の確保と分配は社会における重要な問題の一つであった。それ故、資源を巡る争いは、古今東西、村落間、地域社会間、国家間などの様々なスケールで頻繁に行われてきた。現代においても、このような争いは一向に収まる気配はない。それどころか、資源の枯渇あるいはグローバルなレベルでの資源への需要の高まりが、世界各地で起こる様々なコンフリクトや紛争の重要な要因となっている(松尾 2005)。さらには、最近の気候変動に関する議論において、資源管理のあり方に対するグローバルな取り組みが強調されており、これが資源を巡る争いにも影響を与えることはほぼ間違いない。「資源紛争」や「政治生態学」と呼ばれる分野の研究は、資源のグローバル化が地域のコンフリクトや紛争へと繋がるプロセスを明らかにしてきた(Homer-Dixon 1994, Peluso and Watts 2001)。
一方で、視点をローカルなレベルに転じれば、資源を巡る争いが当事者間の協調やルール・制度の形成といった集合行為へと結びつき、資源の効率的・持続的な管理を生み出した多くの事例を見ることができる(Wade 1988, Blomley 1992)。1980 年代以降、一部の政治学者、経済学者たちは、コミュニティーによる資源の共同管理が「コモンズの悲劇」を克服する仕組みとその条件を、「コモンズ論」として理論化していったのである(Ostrom 1990)。申請者も、タイにおける住民による共有資源の管理制度の生成過程を理論的・実証的に分析し、集合行為が管理制度の生成に繋がるプロセスとその地域性・現代性を検証してきた（Ubukata, 2006; 生方 2007）。
しかし、このようなローカルなレベルにおける協調が、必ずしもより大きな地域レベルにおける協調やガバナンスの向上へと結びついておらず、結果として異なる地域レベルやアクターにおけるコンフリクトや紛争に繋がっていることも多い。このような場合、ローカルな「地域の論理」や「生存（基盤）の論理」と上位の地域レベルにおける論理を接合する制度や規範が必要とされている。すなわち、現代社会において、資源を巡る争いはローカル、ナショナル、グローバルの各レベルで激しさを増しており、これらの対立を協調へと導く制度や規範の生成が焦眉の課題となっているのである。
では、そのような制度や規範は、どのようにして創出することができるのだろうか。また、そのような制度や規範のもとで、住民の生存基盤はどのようにして確保されたり、されなかったりするのだろうか。本研究では、東南アジア大陸部（タイ）において申請者がこれまで行ってきた森林・林業の研究や、比較対象としてのマレーシア、インドネシアおよび他地域における様々な資源（森林・プランテーション、鉱物資源など）の研究をレビューしながら、資源を巡る対立と協調に関連する政治的なプロセスを考察していきたい。

3. 具体的な研究内容
研修中は、まず資源の「性質」、「希少性」、および資源への「アクセスと権原」という 3 つの視点から、経済学、人類学、政治学およびその周辺領域に関する研究のレビューを行う。次に、これまで私が行ってきた 2 つの資源、すなわち私的財としてのユーカリという「植林木」と、共有の「自然林」に関する対立・協調プロセスをこれらのレビューの中に位置付ける作業を行う。最後に、資源を巡る対立・協調の多元性と地域的固有性、そしてそれらの住民の生存基盤への影響について考察する作業を行いたい。なお、渡航後は、受入れ研究者である Tim Forsyth らと関連トピックにおいて共同プロジェクトを立ち上げることになっている。

4. 研究実施の手順とスケジュール

2008 年 9 月－10 月：文献レビュー、資料収集
2008 年 11 月－12 月：データ、資料の分析、自分の研究の位置づけ、論文執筆
2009 年 1 月－2009 年 2 月：まとめ、帰国準備、帰国